

# 宮沢賢治作品のよさを紹介しよう

使用教材：「やまなし」「イーハトーヴの夢」(六年)

北九州市立黒畑小学校

北川 尊士きたがわ たかし

## 1 はじめに

本単元は、宮沢賢治の不思議な魅力ある作品と作者自身の生き方を重ねることで、文学的な文章への見方・考え方を広げることとをねらう。

ここでは、単元を通じた読書活動を位置づけた。紹介したい宮沢賢治の作品を選んだ後に「イーハトーヴの夢」を読み、作品に対する賢治の思いに触れ、自分の選んだ作品と重ねる。そして、「やまなし」を読んで習得した「目のつけどころ」(読みの観点)から、自分の紹介したい作品を読み直すことで、作品の新たなよさを見つける。その後、よさを伝える紹介パンフレットを作る。こうした学習を通して、児童は自分の読みを広げることができると考えた。

また、「目のつけどころ」を習得し、文学的な文章への見方・考え方を広げる手段として、次の三段階の交流を位置づけた。

- ① 自分の考えをつくる
- ② 小グループで交流する
- ③ 全体で交流する

## 2 指導計画(全十二時間)

| 第一時間                     | 第二時間   | 第三時間   |
|--------------------------|--|--|
| 学習課題を作り、計画を立てる。<br>(三時間) | ①「やまなし」を読み、初読の感想を交流する。(一時間)<br>②感想を基に、「目のつけどころ」を決める。(一時間)<br>③「目のつけどころ」により、「五月」の場面のよさを見つけて紹介し合い、自分の選んだ作品のよさを見つける。(二時間)<br>④「目のつけどころ」により、「十二月」の場面のよさを見つけて紹介し合い、自分の選んだ作品のよさを見つける。(二時間) | 自分の選んだ宮沢賢治作品のパンフレットを作り、作品のすばらしさを五年生に紹介する。(三時間) |

## 3 指導の実際

自分の選んだ宮沢賢治作品のさらなるよさを見つけるため、「やまなし」を使って、「目のつけどころ」を習得する学習(交流)を設定した。第二次の第三〜六時に、前述した三段階の交流を、順に位置づけた。

### ①自分の考えをつくる

「やまなし」のよさを見つけるために、付せんを活用して自分の考えをつくる活動を行った。まず、「五月」の場面を読み、心に残ったキーワードを黄色の付せん(一枚に一事項)に書く。次に、書いた付せんで分類し、小見出しを付ける(青色の付せん)。そして、各付せんで矢印で関係づけていったことと「五月」の場面のよさをノートに書く。この過程を通し、個人差はあるものの、児童は、自分なりの考えを形成していった。

自分の考えづくりの指導は、付せんの使

その作品のさらなるよさに気づくことができた。

## 4 おわりに

最初は、宮沢賢治作品のよさを「きれいな光の世界」などと漠然と感じていた児童が、「まばゆい白い火や雪花石膏の板など、色を使った言葉から美しい様子が伝わってくる」といったように、その作品の具体的なよさに気づき、作品への見方・考え方を広げていった。

この学習では、三段階の交流を位置づけた。これらを通し、児童は、自分が読めていないところに気がつくことができていたように思う。さらに、自分の選んだ作品のよさをより深く考え、読むおもしろさを実感していた。この実感を伴った理解が、文学的な文章への見方・考え方を広げることにつながったと考える。



▲付せんを活用したノート

い方の具体例を示したり、よい例として児童のノートを紹介したりするなかで行った。児童一人一人がイメージをもちながら、自分の考えをつくっていたことから、有効な指導であったと考える。

## ②小グループで交流する

自分の考えを付加・修正することができるよう、小グループ(三〜四人)での交流を設定した。初めに、自分の考えを述べる。そして、その考えに対して疑問に思うことを尋ねたり、自分の考えと比較して考えたりする。この交流により、児童が自分の考えを付加・修正していき、見方・考え方を広げていった様子がうかがえた。

### 「小グループでの交流の一場面」

A「五月」は、不思議な世界がとてもしきれ

## ③全体で交流する

よさの理由を全体で出し合い、関係づけることにより、児童は、「目のつけどころ」を見つけていった。「やまなし」で見つけた「目のつけどころ」は、「賢治らしい表現」「構成」「メッセージ」「出来事」「登場人物」「色をイメージする言葉」であった。これらの観点で自分の選んだ作品を読むことで、



▶小グループでの交流の様子。ノートを見せながら考えを述べる。